

ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第123回

島守の塔



情報を発信するという仕事を長年続けてきた私は、常に様々な分野に興味をもつように心がけ、広く浅く色々なことを学習してきたつもりだ。しかし、当然知っておくべきことが欠落していること

がたまにあり、恥ずかしい思いをすることがある。

島田 勲元^{あさひ}沖縄県知事のことその一つだ。

昨年、神戸の歴史についての取材中に、沖縄県の人々に「島守」と呼ばれ慕われている神戸出身の官選知事がいるという話を聞いた。官選知事とは、選挙により選出されるのではなく、国や省庁に任命された官僚が務める知事のこと。この制度は、第二次世界大戦後に地方自治法が施行されるまで続き、島田氏は沖縄県最後の官選知事だった。

島田氏をご存じない読者のために簡単に紹介させていただく。

明治34年、神戸市須磨区で開業医の長男として生まれた島田 勲氏は、旧制神戸二中（現・兵庫高校）、三高（現・京都大学教養学部）で学び、東京帝国大学法科（現・東京大学）へ進学。学生時代は、野球やラグビーの選手としても活躍し、文字通り文武両道に秀でていた。



平和祈念資料館から海を望む
Okinawa April.2016

東大卒業後は内務省に入省。戦局深まる昭和20年1月に沖縄県知事の打診を受ける。すでに米軍の沖縄上陸は必至と見られており、赴任すれば知事の身にも危険がおよぶことは明らかだった。前任者は出張を繰り返して、すでに沖縄から逃げ出しているような状態。島田氏には妻子もあり、周囲は反対した。しかし「誰が行かねばならないのだから」と、自決用の青酸カリを懐にし、死を覚悟のうえ単身で赴いた。多くの国民が死と隣り

合わせに生きていた時代とはいえず、その胸中はどうなのものだっただろうか。察するに余りある。

沖縄到着後、早速、島田知事は県民を北部へと疎開させ、台湾から食糧を調達。軍部との関係改善をするなど多くの仕事を精力的にこなした。その姿に、前任の知事に見捨てられ不安を感じていた県職

員や県民はこの人にならついていける」と心から信頼し、敬愛したという。

3月に入ると空襲が始まり、4月には米軍が上陸。激しい地上戦で多くの日本兵や県民が命を落とすようになっていくなか、5月末に島田氏は警察と沖縄県庁の解散を宣言。「皆は生き延びて、戦後、沖縄再建のために働いてほしい」と言い残し、摩文仁^{まぶんじん}の蒙に向かう。途中、荒

れ地に散乱するおびただしい遺体に手を合わせ、悲痛な表情の県民たちを励ましながら…。その姿には、後光が差していたと語り伝えられている。

そして6月26日、島田知事は蒙を出たまま消息を絶つ。享年43歳だった。

わずか5カ月ほどの在任期間に、疎開によって20万人もの県民の命を救

い、沖縄の最も苦しい時期に県民のために尽くし、県民の心の支えとなり散っていった島田知事の姿は多くの人の心を打ち、戦後の混乱が続く昭和26年には県民の浄財により、摩文仁の丘に知事と殉職した県職員の慰霊碑「島守の塔」が建立された。島田氏の功績は、世代を超えて語り継がれ、その出身地である神戸に特別な想いを抱く沖縄の人も多いと聞く。

先日、出張で沖縄へ出かけた際、平和祈念公園内の摩文仁の丘を訪ねた。緑豊かな広々とした園内の高台に、島守の塔は周囲を見守るかのよう静かに建っていた。南国らしい色鮮やかな花が供えられ、抜けるように青い空の下、黒い大きなアゲハチョウが優雅に舞っていた。

職権を濫用し、私腹を肥やす一部の政治家が世の中を騒がせているが、責任やリーダーシップの取り方、人としての生き方等、基本的な姿勢を島田氏に学んではどうだろうか。



島田知事と殉職した
県職員を合祀した島守の塔に献花
Okinawa April.2016